１．アソシエーション理論　田畑稔

【１】『マルクスとアソシエーション』をめぐって　　—論争的文脈の紹介

マルクス解釈としての妥当性の問題

アソシエーションを中心にマルクスを読み直す方向は、今日のマルクス解釈の非常に有力な一潮流になっているということは、最低限言えると思われます。

影響史的比較論的アプローチの克服

従来マルクスとアソシエーションの関係を論じる時には、おうおうにして、「サンシモン主義的な制約がマルクスにある」とか、「プルードンと比べて国家主義的だ」とか、そういう比較論、誰の影響をどう受けているという影響論、を中心にマルクスを見ていたものが多かったといえるでしょう。

マルクスのアソシエーションというものを、マルクス自身の理論の全体構成の中で内在的に明らかにすることによって、従来光が当たっていなかったものに光を当てることができたという、かなり強い自負をもっているわけです。

未来社会の机上プランと移行諸形態

　それから社会主義経済論の専門家の中には、「ソ連が崩壊したのに、それに代わるような「可能な未来の経済システム」を提示していないじゃないか」という反響もありました。これも事実その通りなのですが、この批判も、ちょっと私には釈然としないのです。いわゆる「ソ連型の社会システム」が崩壊したからといって、新しいシステムをになう現実の歴史的諸主体も現実の歴史的諸プロセスもなしに、即刻机上のプランを対置しようとすること自身が、大いなるミスリードになりかねないんじゃないかと思われるからです。確かに、社会主義経済学者たちは経済システムというのが出来上がって初めて学者としてやれるわけですから、システムを語りたい気持ちはよくわかります。でも一つのシステムの生成というのは非常に複雑な過程であるということは今日、自然諸領域でさえ言われているわけですね。ましてや、日本なら日本で、そしてグローバルな世界で、我々がアソシエーショナルなシステムを作っていくということになりますと、偶然的諸条件を含む非常に複雑な歴史的諸プロセスを覚悟しておかなければなりません。

実践的焦点はあくまで移行諸形態（過渡的諸形態）に当てるべきだと、私は考えております。つまり我々が現に入り込んでいる生活諸関係から出発しつつ、未来社会へ向かってこれらを決定的に一歩超え出るような変革目標を、実践と討論を行いつつ共に作り上げる

活動家サイドからの反響で言うと、第一は「実践的諸方策を提示していない」というものです。

　マルクスから何から何まで取ってこようとする姿勢が。我々にとっての実践的諸方策は、現に我々が入り込んでいる生活諸関係から自覚化され定式化され共有されるべきもので、我々にとっての実践的諸方策を、この本のようなマルクス研究から直接取ってくるというような倒錯したドグマティズムの意識は、私は持ってないわけですね。マルクスから得られるもの、得るべきものは、あくまで、アソシエーションの方向へ向かって、自分の生き方なり、活動の仕方なり、日本社会のあり方なり、現代世界なりを変革していく、その実践的諸方策を導くための「いくつかの基本的な足場」にとどまるのでして、あとで詳しく述べますように、そういう「基本的な足場」については、『マルクスとアソシエーション』で、いくつか提示しようとしているわけです。

闘争や権力問題の回避？

　第二の疑念は「協同組合やＮＰＯやボランティアだけで社会主義などできるのか」とか、「権力との闘争や権力のための闘争を回避してしまうのではないか」とか、「新保守主義的な国家リストラ策に乗ってしまうのではないか」というものです。

ひどい場合には、慈善事業のようにイメージされるんですね。それは今までの左翼の活動家たちの多くがアソシエーションの概念をまともに考えてこなかった結果なのです。アソシエーション論というものが今日、どういう地平に立っているのかということを、一度し

　しかし同時に、上の疑念には、アソシエーション論への転換にともなう実践的混乱への危惧も、まだ実践的試練に耐えていない若い思想への慎重さも、表現されております。その意味では、これらの疑念については、私も一応は了解できますし、アソシエーション

をめくる今後の討論の中でも、批判的意味を持つだろうと確信しております。これらの疑念に答えるのはこれからということになるでしょう。なによりも、実践的諸方策のレヴェルで議論が具体化することが不可欠でしょう。理論的には、アソシエーション論のマルクス的特質を強調することによって、これらの疑念をある程度は解消することができるように私は考えております。しかし最終的には、アソシエーション論的転回を採用することの妥当性をめぐっては、採用するものも採用しないものも、お互いに歴史の審判を仰ぐ覚悟をするほかないでしょう。　　（次号へ続く）

①-2　田畑　稔■『マルクスと哲学――方法としてのマルクス再読』刊行に寄せて

〈もう一度〉オリジナル・マルクスへと目を向け直す挑戦なのであり、また、マルクスを 21 世紀の地平へと超え直す挑戦なのである

著者は、10 年前に『マルクスとアソシエーション』（新泉社、1994 年）を上梓し、アソシエーション論をキー概念に「マルクス像の変革」を呼びかけた。また、マルクスのアソシエーション論を現代の社会変革論の地平へと超えるための協働作業をさまざまな研究・実践領域の方々と行い、『アソシエーション革命へ』（社会評論社、2003 年）を刊行している。今回の『マルクスと哲学』は、マルクス思想の裾野にさらに広く、深く立ち入って、いわゆる「マルクス主義哲学」との境界線を全面的に引き直し、我々自身の思想の 21 世紀的再建にとってのマルクス再読の意義を語ろうとするものである。（2004 年 5 月　田畑　稔）

２.「裸の王様の経済学」　松尾匡

☆アソシエーションの構想

共産党宣言－各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような、一つの協同社会

資本論－共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する、自由な人々の連合

☆自立した個人の水平的な意識的連合、ソ連型の上意下達のピラミッド型(国有集権型)の国民経済とは正反対、

☆ 19 世紀には、割と普通の未来社会イメージ－プルードン、マルクスもその一人として、オーウェン、フーリエ。(オ)協同組合工場からなる地域コミュティ、(フ)適正規模の人々が連合した自治共同体

☆唯物史観からも

経済的土台の胎内で次の時代の新しい生産様式が育ってきて、それが自由分に育った後になって、その現実を追認する形で、政治的上部構造がそれにふさわしいものに取り替えられる。

※アソシエーション的な生産様式が育って、それを追認する形で革命が起こり、政治体制が変わる－という順番。=ロシア革命などは、本来の社会変革の正道ではなかった。

３．過渡期と人間　大谷禎之介(未来社会論から)

・「収奪者の収奪」の過程が開始されてからアソシエーションが成立するまでの時期が、資本主義社会からアソシエーションへの本来の過渡期である。

・この過渡期の目標は、何よりもまず、労働者の個人的所有を再建すること、それによって同時に、資本主義的生産の下で社会的占有の形で潜在的に生まれていた生産手段の社会的所有を顕在化させることだが、そのための方策が、労働する諸個人から分離、自立化して彼らを支配する主体となっていた生産手段を収奪者の手から収奪し、自らの手に取り戻すことである。そして、もっとも困難な課題である、賃労働と、その基礎をなす私的労働との完全な廃止が成し遂げられたところで、過渡期が終了する。

・さらに。この過渡期のきわめて重要で決定的な課題は、労働する諸個人が、アソシエーションを自覚的に形成する能動的な社会形成者に成長することである。この課題が果たされたところで、はじめてアソシエーションが成立するのである。

③－２　アソシエートした諸個人の発達
・共産主義の「より高い段階」－①個人が分業－すなわち労働の分割－に奴隷的に従属することがなくなっている、②精神労働と肉体労働との対立がなくなっている、③労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となっている、④個人の全面的な発展にともなって、彼らの生産諸力－すなわち彼らの労働の力能－も増大し､これによってこの社会の富のあらゆる泉がいっそう豊に湧き出るようになっている。
・労働のあり方の発展と労働する人間諸個人の発展の(プロセス)
・①②は、「第一段階」。労働のあり方をここまで変化させる。
・③④は「より高い段階」。労働は、人間の本源的な存在形態そのものである。人間諸個人は、本源的かつ本質的に、労働する諸個人である。－労働する諸個人の変革過程
・アソシエーションを担う労働する人間諸個人の形成と、それによる労働疎外の最終的な克服。

４．マルクスとアソシエーション　　田畑稔
・マルクスは何度か権力に至る「平和的な道」に言及した。
　アムステルダム演説 1872 年「アメリカ、イギリス、オランダ…労働者たちが（平和的な道を通って）彼らの目標に達しうる国があることも否定しません。たとえそのことが正しくても大陸のほとんどの国々では、われわれの革命のテコが暴力であるに違いないということもまたね承認されなければなりません」
・1895 年老エンゲルス「フランスにおける階級闘争」（自覚的少数者によって遂行された諸革命の時代は過ぎ去った）（プロレタリアートは厳しく粘り強い闘争で一陣地から一陣地へと徐々に進行しなければならない）
・田畑…イギリスは 1850 年代、フランスは 1870 年代後半（第三共和政の定着）、ドイツは 1871 年帝国議会開設以降は部分的に第２モデル（平和的）の特徴を持ったが、マルクスは基本的に第１モデルで見た。
　レーニンは独占段階での平和革命モデルは無効化したと見た（背教者カウツキー）。